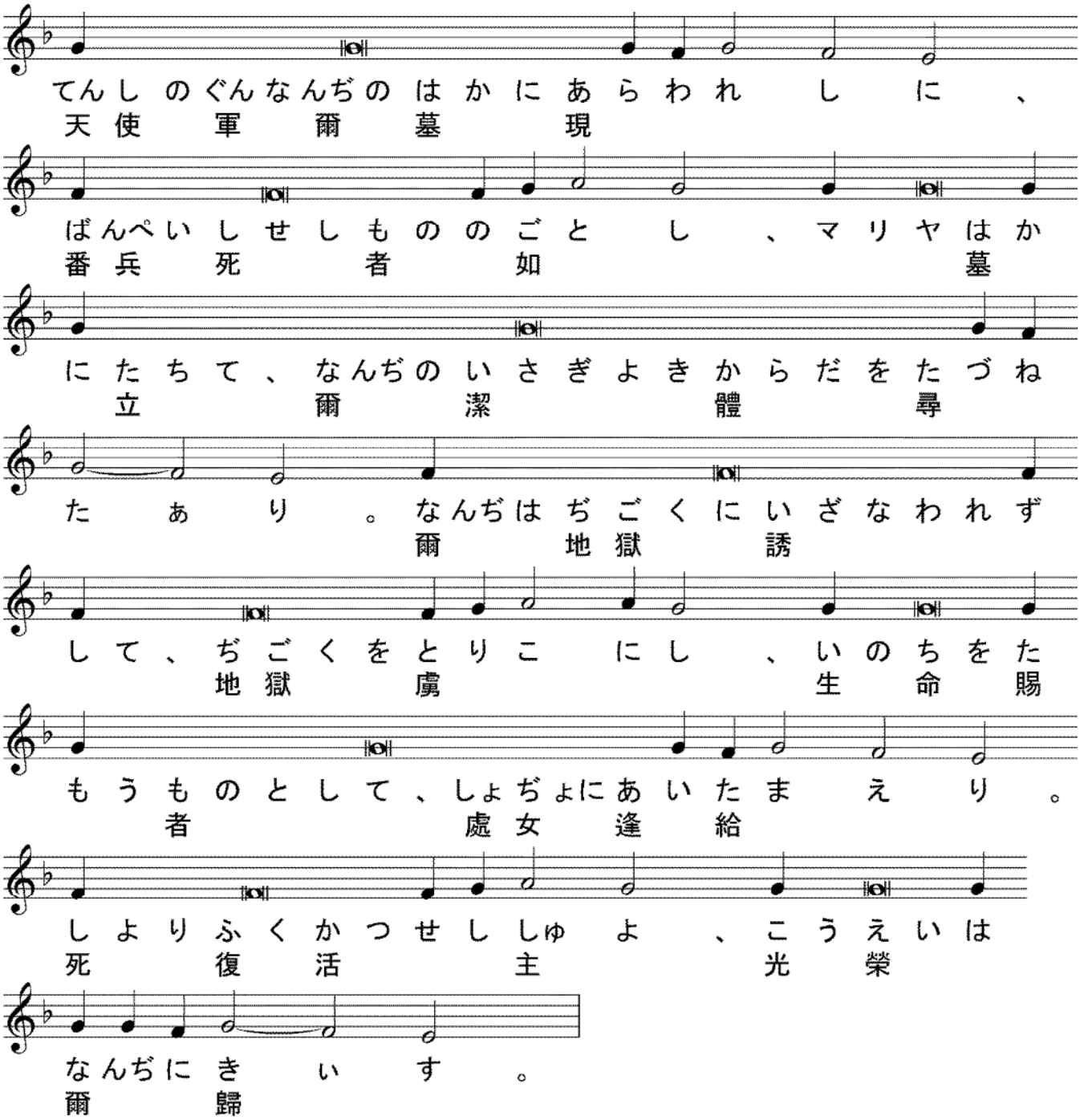
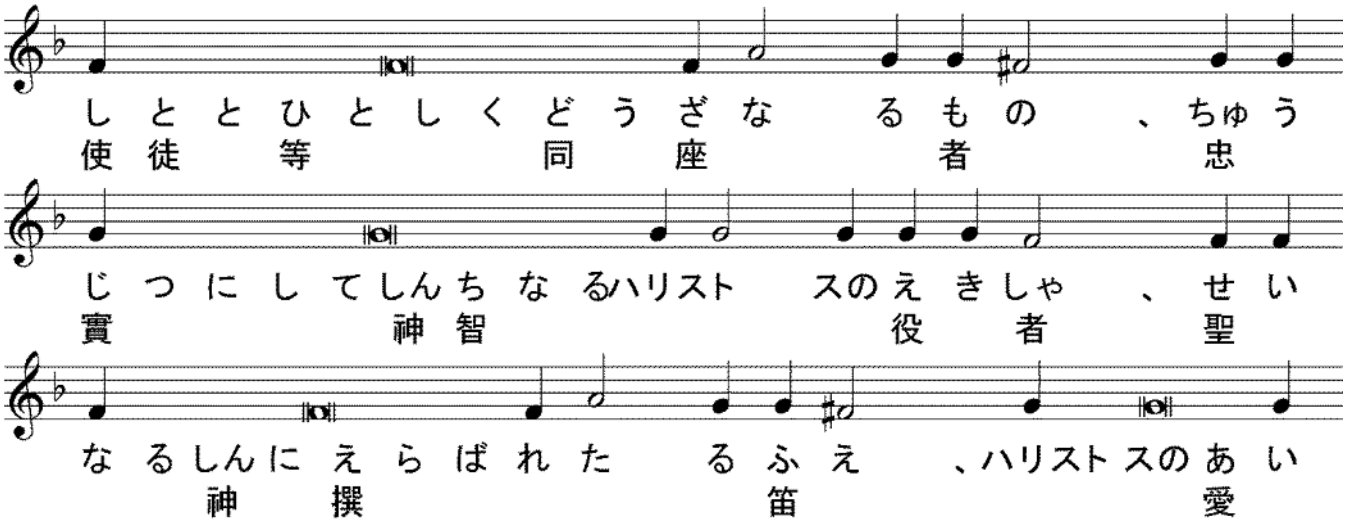
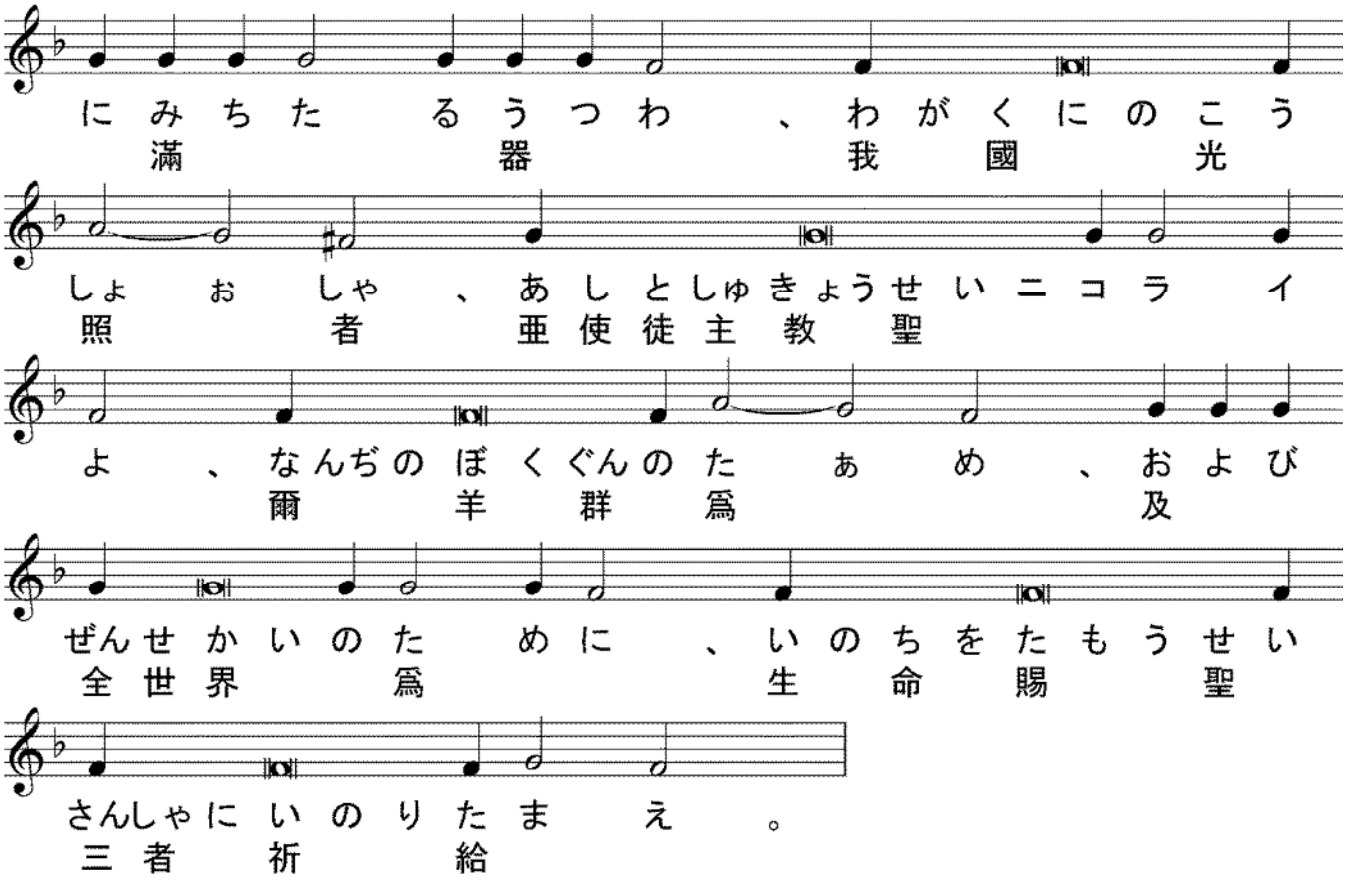
【　復活のトロパリ　第６調　】

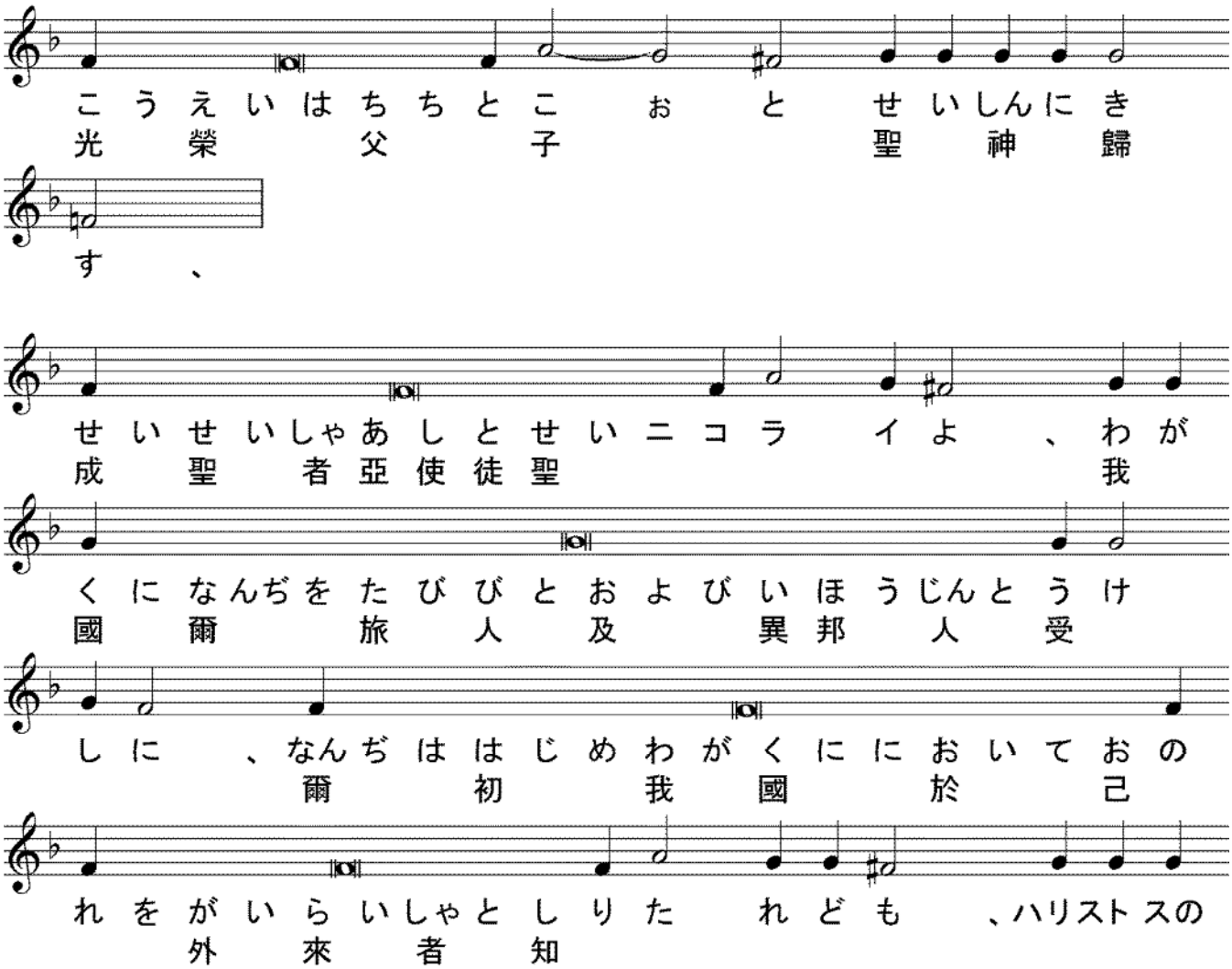


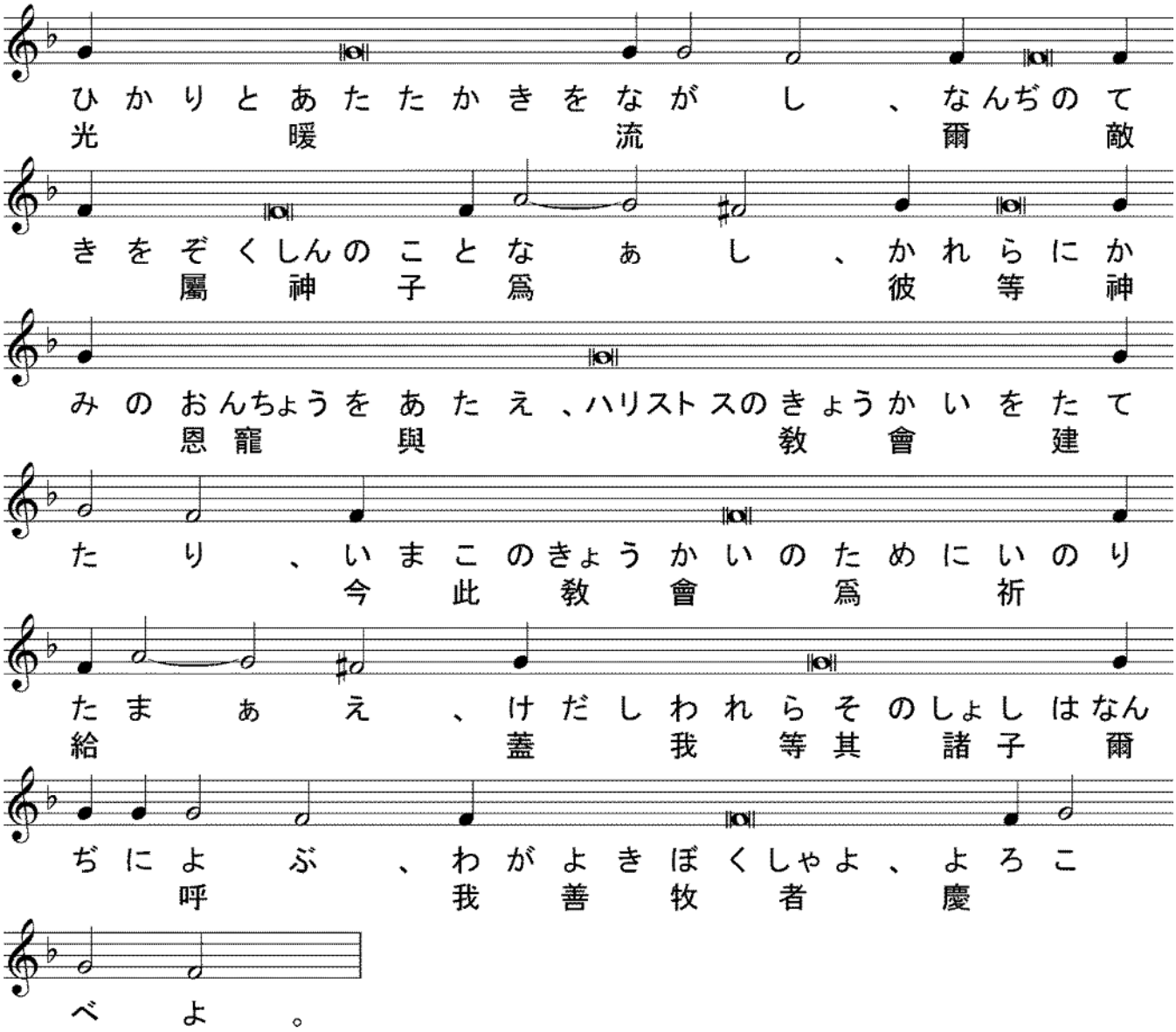
【　日本の亜使徒ニコライのトロパリ　第４調　】



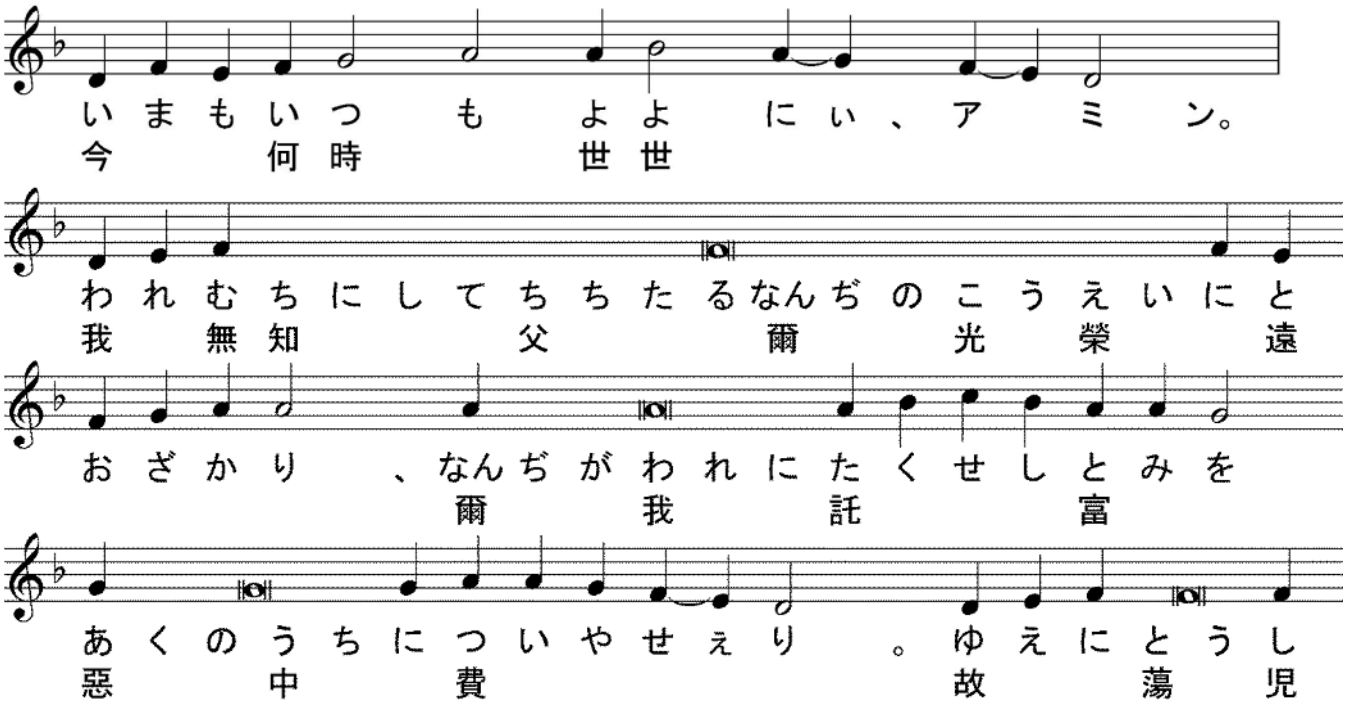


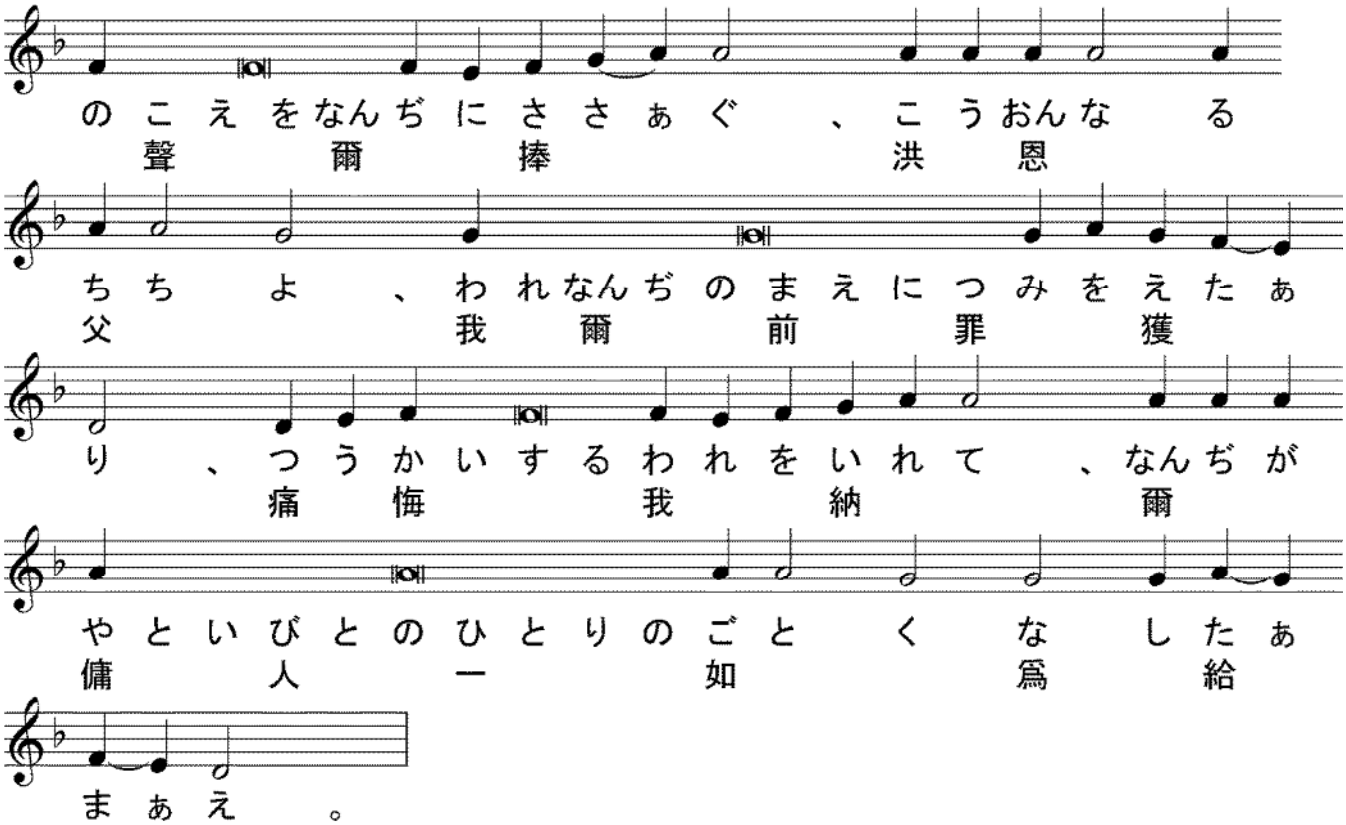
【　日本の亜使徒ニコライのコンダク　第４調　】




ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖流爾敵
きをぞくしんのことなぁし、かれらにか
屬神子爲彼等神
みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩寵與教會建
たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今此教會爲祈
たまぁえ、けだしわれらそのしょしはなん
給蓋我等其諸子爾
ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼我善牧者慶
べよ。

【　蕩児のコンダク　第３調　】


いまもいつもよよにぃ、アミン。
今何時世世
われむちにしてちちたるなんぢのこうえいにと
我無知父爾光榮遠
おざかり、なんぢがわれにたくせしとみを
爾我託富
あくのうちについやせぇり。ゆえにとうし
惡中費故蕩児

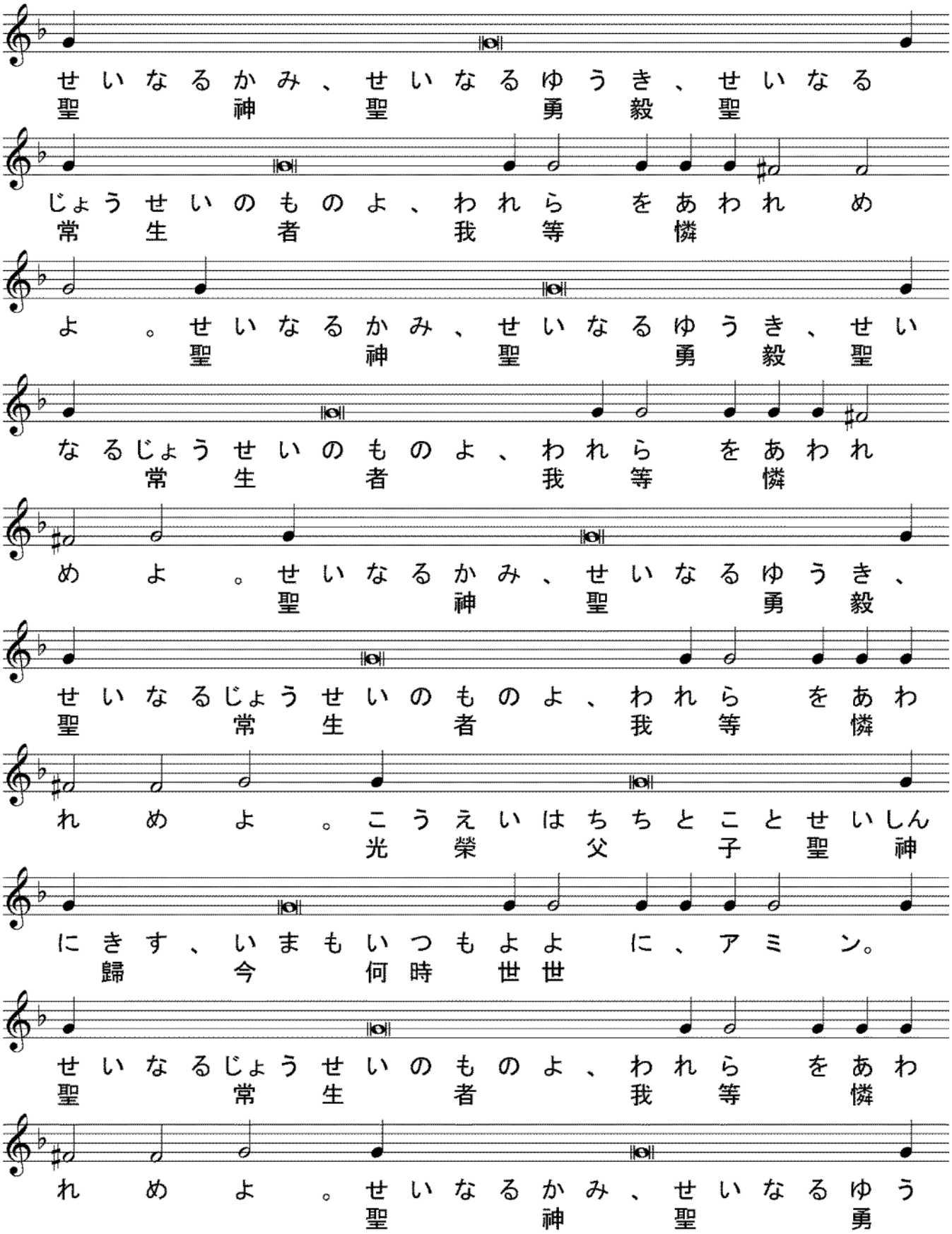


司祭)（ 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 ）

司祭) **蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、**

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】


せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょうせいのものよ、われら をあわれ め
常 生 者 我 等 憐
よ 。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖
なるじょうせいのものよ、われら をあわれ
常 生 者 我 等 憐
め よ 。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅
せいなるじょうせいのものよ、われら をあわ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神
にきす、いまもいつもよよ に、アミ ン。
歸 今 何 時 世 世
せいなるじょうせいのものよ、われら をあわ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。せいなるかみ、せいなるゆう
聖 神 聖 勇

司祭）（ 默誦：主(しゅ)の名(な)に依(よ)りて來(き)たる者(もの)は崇(あが)め讃(ほ)めらる、ヘルヴィムに座(ざ)する者(もの)よ、爾(なんぢ)は其國(そのくに)の光榮(こうえい)の寶座(ほうざ)に在(あ)りて恒(つね)に崇(あが)め讃(ほ)めらる、今(いま)も何時(いつ)も世世(よよ)に、 ）

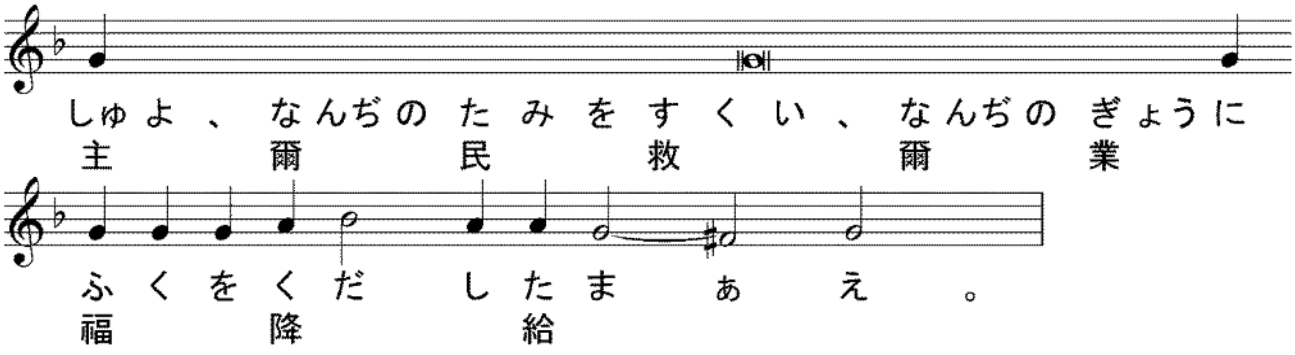
【 提綱(プロキメン) 主日第６調 】

司祭） 愼(つつし)みて聽(き)くべし、衆人(しゅうじん)に平安(へいあん)、

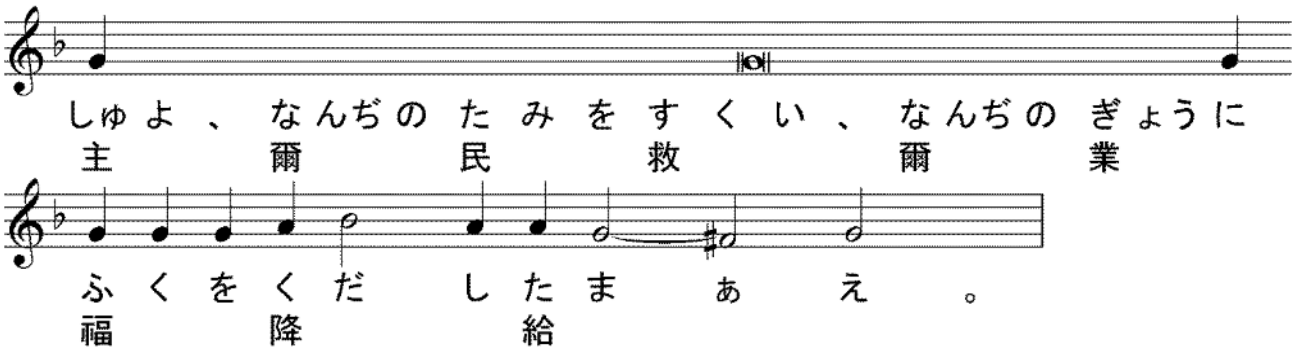
誦經） 爾(なんぢ)の神(しん)にも、

司祭） 睿智(えいち)、

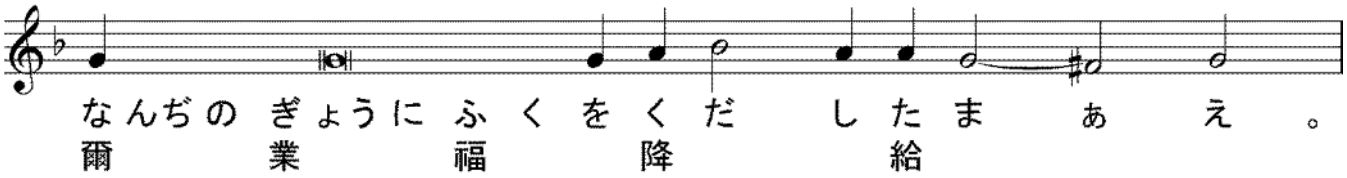
誦經） プロキメン、主(しゅ)よ、爾(なんぢ)の民(たみ)を救(すく)い、爾(なんぢ)の業(ぎょう)に福(ふく)を降(くだ)し給(たま)え、



誦經） 主(しゅ)よ、我(われ)爾(なんぢ)に呼(よ)ぶ、我(われ)の防固(かためよ)、我(わ)が爲(ため)に默(もだ)す母(なか)れ、



誦經） 主(しゅ)よ、爾(なんぢ)の民(たみ)を救(すく)い、



【 使徒経（アポストロス） 135端 コリンフ前書6章12～20節 】

司祭）睿智（えいち）、

誦經）聖使徒パヴェルがコリンフ人（じんたつ）に達する前書（ぜんしょ）の讀（よみ）、

司祭）謹（つつし）みて聽（き）くべし、

誦經）兄弟（けいてい）よ、凡（およそ）の物我（ものわれ）に許（ゆる）されたり、然（しか）れども凡（およそ）の物益（ものえき）あるには非（あら）ず、凡（およそ）の物我（ものわれ）に許（ゆる）されたり、然（しか）れども其一（そのいつ）も我（われ）に主（しゅ）たるべからず。食（しょく）は腹（はら）の爲（ため）、腹（はら）は食（しょく）の爲（ため）なり、然（しか）れども此（これ）と彼（かれ）と神（かみ）之（これ）を廢（はい）せん、身（み）は淫行（いんこう）の爲（ため）に非（あら）ず、乃（すなわち）主（しゅ）の爲（ため）なり、主（しゅ）も亦（また）身（み）の爲（ため）なり。神（かみ）は主（しゅ）を復活（ふくかつ）せしめたり、其能（そのちから）を以（もつ）て我等（われら）をも復活（ふくかつ）せしめん。豈（あにし）知（しら）ずや、爾等（なんぢら）の身（み）はハリストスの肢（えだ）なるを。故（ゆえ）に我（われ）ハリストスの肢（えだ）を取（と）りて、淫婦（いんぷ）の肢（えだ）と爲（な）さんか、然（しか）すべからず。或（あるい）は知（し）らずや、淫婦（いんぷ）に附（つ）く者（もの）は此（こ）れと一體（いつたい）と爲（な）るを、蓋（けだし）云（い）えるあり、二（ふたつ）の者（もの）は一體（いつたい）と爲（な）らんと。然（しか）れども主（しゅ）に附（つ）く者（もの）は主（しゅ）と一神（いつしん）と爲（な）るなり。淫行（いんこう）を避（さ）けよ、凡（およ）そ人（ひと）の行（おこな）う罪（つみ）は身（み）の外（そと）に在（あ）り、然（しか）れども淫（いん）を行（おこな）う者（もの）は己（おのれ）の身（み）を犯（おか）すなり。豈（あにし）知（しら）ずや、爾等（なんぢら）の身（み）は爾等（なんぢら）の衷（うち）に居（お）る聖神（せいしん）、爾等（なんぢら）が神（かみ）より受（う）けし者（もの）の殿（でん）にして、爾等（なんぢら）己（おのれ）に屬（ぞく）するに非（あら）ざるを。蓋（けだし）爾等（なんぢら）は價（あたい）を以（もつ）て買（か）われたり、故（ゆゑ）に均（ひと）しく神（かみ）に屬（ぞく）する爾等（なんぢら）の身（み）を以（もつ）て、爾等（なんぢら）の靈（たましい）を以（もつ）て、光榮（こうえい）を神（かみ）に歸（き）せよ。

＊＊

（比較用　口語訳）兄弟たちよ、すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配されることはない。食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼすであろう。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためである。そして、神は主をよみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。あなたがたは自分のからだがキリストの肢体であることを、知らないのか。それだのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていけない。それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。しかし主につく者は、主と一つの霊になるのである。不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。

＊＊

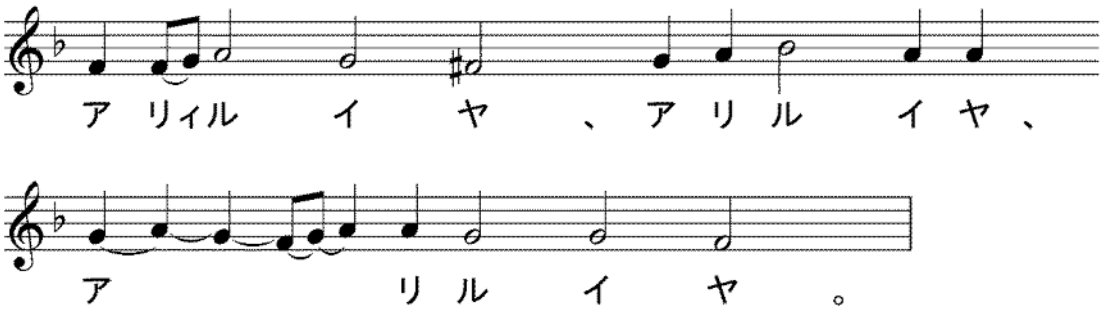
【　アリルイヤ　主日第６調　】

司祭）爾に平安、

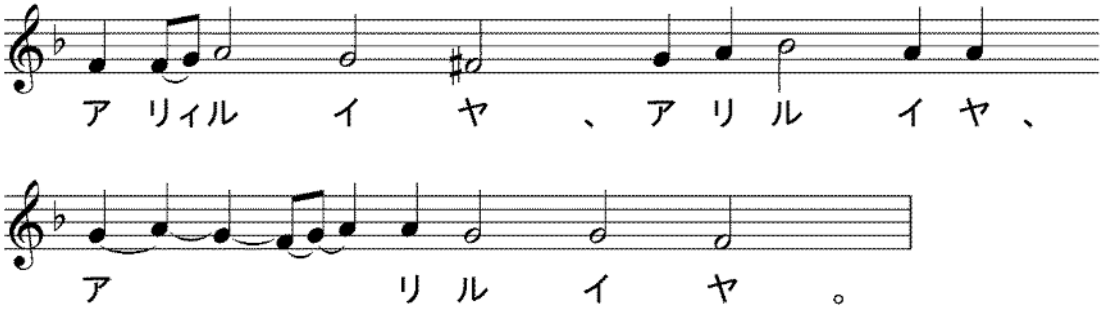
誦經）爾の神にも、

司祭）睿智、

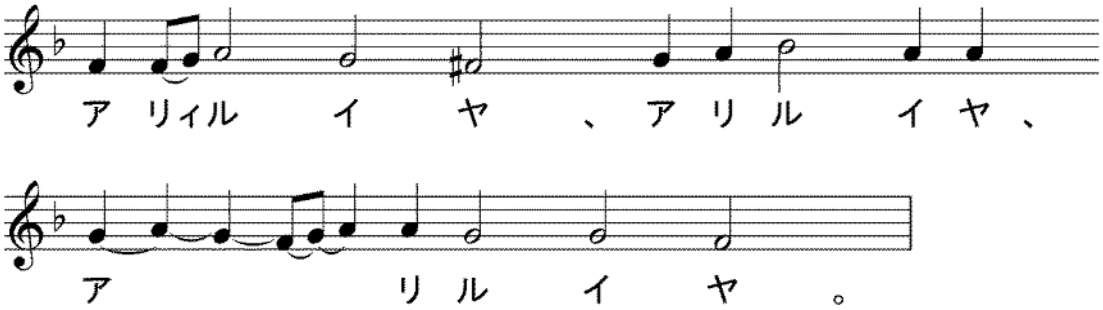
誦經）アリルイヤ、



誦經）至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、



誦經）主に謂う、爾は我の避所、我の防禦、我が賴む所の我の神なりと、

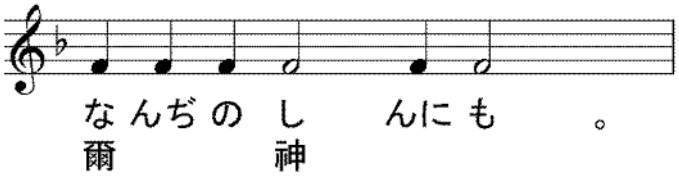


司祭）（　黙誦：人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誡を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

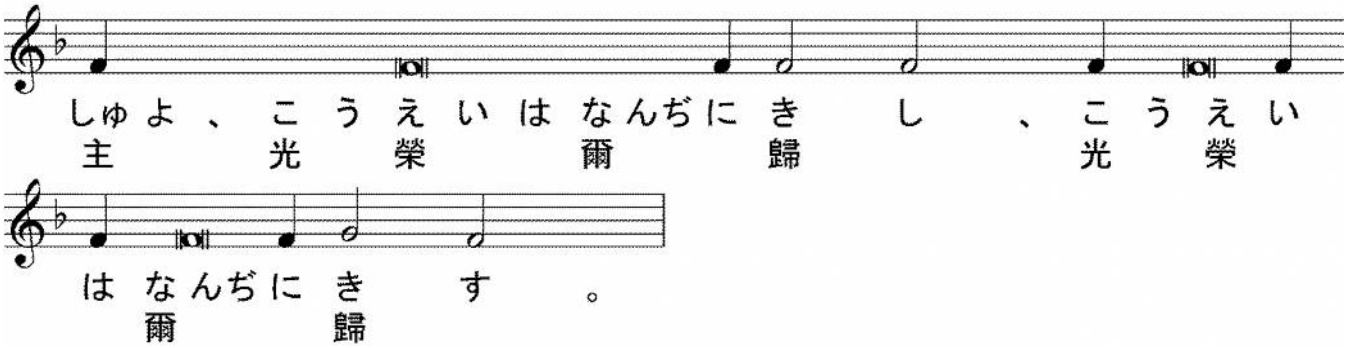
爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。　）

【　福音經（エヴァンゲリオン）　ルカ福音書79端　15章11～32節　】

司祭）睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭）ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭）謹みて聽くべし、主は左の譬を設けて曰えり、或人に二の子あり、其次子父に謂えり、父よ、我が得べき産業の分を我に與えよ、父其産業を彼等に分てり。幾日も經ざるに、次子は其得たる者を盡く集めて、遠き地に旅行し、彼処に放蕩に生活して、其産業を浪費せり。盡く耗ししに及びて、其地に大なる饑饉起り、彼始めて乏しきを覺えたり。乃往きて、其地の住民の一に身を寄せたれば、其人彼を田に遣して豕を牧わしめたり。彼は豕の食う豆莢を以て、其腹を充たさんと欲したれども、彼に與うる者なかりき。遂に自ら省みて曰えり、我が父には幾何かの傭人の糧に餘れるあるに、我は飢えて亡ぶ。起ちて、我が父に往きて、之に謂わん、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず、我を爾が傭人の一の如く爲せと。乃起ちて、其父に往けり。尚遠く在りし時、其父彼を見て憫み、趨り前みて、其頸を抱きて、彼に接吻せり。子は之に謂えり、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず。然れども父は其諸僕に謂えり、最も

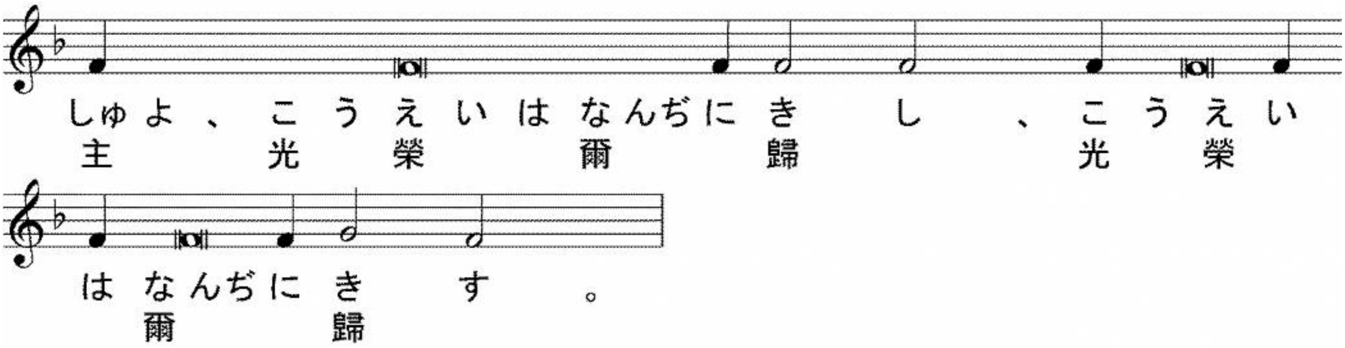
美しき衣を出して、彼に衣せよ、指鐶を其手に、履を其足に施せ。且肥えたる犢を牽きて、之を宰れ、我等食い樂しまん。蓋此の我が子は死して復生き、失われて又得られたり。是に於て彼等樂しめり。適其長子田に在りしが、歸りて、家に近づける時、樂と舞とを聞きたれば、一の僕を呼びて、是れ何事ぞと問いしに、彼曰えり、爾の弟來りしなり、爾の父は、其恙なくして彼を得たるに因りて、肥えたる犢を宰りたり。長子怒りて、入るを欲せざりき。其父出でて、彼に勸めしに、彼父に答えて曰えり、視よ、我多年爾に事えて、未だ嘗て爾の命に違わざれども、爾未だ嘗て小山羊を我に與えて、我を友と共に樂しましめざりき。然るに此の爾の子、妓と共に爾の産業を耗しし者の來りし時は、爾彼の爲に肥えたる犢を宰れり。父彼に謂えり、子よ、爾は常に我と偕に在り、我に屬する者は皆爾に屬す。惟此の爾の弟は死して復生き、失われて、又得られたるが故に、我等喜び樂しむべきなり。

＊＊＊

（比較用　口語訳）主は譬をお話しになった。「ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききんがあったので、彼は食べることにも窮しはじめた。そこで、その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼を畑にやって豚を飼わせた。彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』。それから祝宴がはじまった。ところが、兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなさったのです』。兄はおこって家にはいろうとしなかったので、父が出てきてなだめると、兄は父にむかって言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。それだのに、遊女どもと一緒になって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなた

の子が帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふりなさいました』。すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』」。

＊＊＊



※　聖体礼儀③（金口イォアン）へ